



シンヌラツパ（先祖供養）行う

8月17日（木）、ポロチセで



博物館では、今年も恒例のシンヌラツパ（先祖供養）を行いました。シンヌラツパは、亡くなった人の世界へ、お酒やご馳走を届ける行事です。

ポロチセの中で、カムイフッチ（火の神）に祈りを捧げ、チセ（復元家屋）の東側にある先祖のヌサ（祭壇）の前で、供物や飲み物を捧げながら、自分達の先祖や、博物館と親交のあった方々に語りかけました。見学していたお客さんも勧められるままに、アイヌ民族のしきたりに従って、思い思い、供物や言葉を捧げていました。

儀式の後には、参加した人たちにチェブオハウ（魚汁）やラタシケブ（和え物）などの伝統料理が振舞われました。

シリカブ送り儀礼

8月17日（木）、シリカブ送り儀礼実行委員会主催のシリカブ送り儀礼を当館ポロチセにて行いました。

かつて白老では、シリカブ（カジキマグロ）漁の漁獲後に、シリカブの靈魂をカムイ（神）の国へ送り返す儀礼を行っていました。

胆振、日高太平洋沿岸のアイヌ民族にとって重要な儀式であったシリカブ（マグロ類）の送り儀礼を復元、再現するため、平成15年より実施しています。

儀礼は、シリカブの頭を東側に向けて置き、頭から切り取ることから始まりました。背ビレ、腹ビレ、尾ビレの順でヒレを切り取り、胴体を肉と骨に分けて解体。頭、胴体の順でイトムンプヤラ（南の東側の窓）からポロチセ内に入れて上座に置き、送り儀礼終了の祈りを行いました。同日に行ったシンヌラツパ後の昼食時には、シリカブのオハウも提供しました。

今回で4回目となったこの儀礼には、札幌大学や苫小牧駒澤大学などの学生も見学に訪れました。



豊漁を祈る ペツカムイノミ

今年も秋サケ漁の季節になりました。8月24日(木)、白老町ウヨロ川の川岸にて、川の神にサケの豊漁を願うペツカムイノミを実施しました。

儀式の後、川面にはサケがのぼっていく姿が見受けられました。

サケは雪が降る頃、寒干しにしてから囲炉裏の上に吊るして煙をかけ、保存用に加工します。こうして加工されたサケは、「サツチェブ(乾いた魚)」と呼ばれ、今では珍しいものです。昨年は、3,500本を生産し、ほぼ完売しました。今年の冬はさらに千本増やして、4,500本のサツチェブを作り、来年売店にて販売する予定です。



六大学合同合宿

8月21日～22日の2日間、札幌大学、札幌学院大学、千葉大学、東京外国語大学、東北芸術工科大学、早稲田大学(計34名)の学生が、合同で当館復元チセ(家屋)に宿泊しての、アイヌ文化体験学習を行いました。

楽器演奏、古式舞踊、すだれ編み、食文化体験など6種類の多彩な体験メニューを通じて、アイヌ文化を体感するというプログラムでした。

盛り沢山のメニューをこなした学生たちは、2日間で多くの作業を行って疲れたようですが、学生たちからは、更に多くのことを学習したい、一つ一つのメニューをもっとじっくり学習したかった。という感想が多く寄せられました。

また、「踊りの歌と振りをまとめたプリントを希望」、「宿泊したチセの大きさが、人数に対して狭かった」などの意見や、「他大学と合同というのはとても良いと思う」、「なかなかできない経験をたくさんできました！皆様ありがとうございます」との感想をいただき、体験学習内容をより良くするために、学生の感想は博物館にとって今後の参考になりました。



楽器演奏体験



食文化体験(焼きサケづくり)



弓矢製作体験後の試し打ち